

担当者/産業医巡視時等のチェックリスト

- 心停止時の緊急時対応計画(EAP)策定
- EAPに則った緊急時マニュアルの作成と啓発
- 少なくとも年1回現場に即した救命講習を実施
- 緊急時対応チームの策定
- 緊急時対応体制の起動方法の共有
- 関係各所の連絡先の共有、緊急時連絡手段の確保
- 心停止リスクの高い従業員の把握
- 消防への救急車動線/案内方法の共有
- 心停止事象発生時は終了後の振り返りとメンタルケア

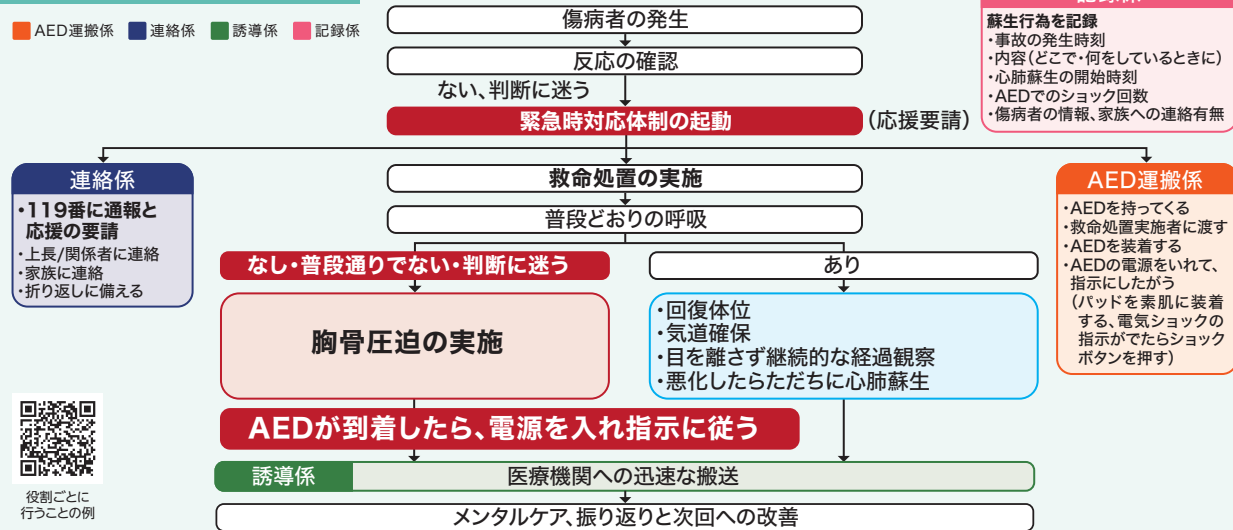
- AEDを配置
 - どこでも3分以内に電気ショックができる
 - 垂直方向への移動へも対策をしている
 - 24時間使用可能な場所へ設置
 - 管理責任者を配置し定期点検の実施
 - 遠距離からでも見やすい表記の工夫

緊急時連絡体制

会社・施設名

緊急時施設内連絡先	名称	TEL	-	-
第1優先連絡先	第2優先連絡先	会社・施設責任者		
氏名	氏名	氏名		
連絡先	連絡先	連絡先		

緊急時対応フロー(例)



AEDの設置場所

- ① AEDや搬送機材設置場所
- ② 機材保管場所を記入

救急車導入、搬送に必要な情報

- 案内図 ① 救急車導入経路 ② 停車位置 ③ 傷病者搬送経路の導線を記入

AED を「置いてある」から「使える」に

EAP Emergency Action Plan: 緊急時対応計画



1 AEDの戦略的配備、場所の把握

迅速に使用できるようAEDを配置し、場所を周知する



2 定期的なトレーニング

現場に即したトレーニングを定期的に繰り返す



3 体制づくり

計画をたてて実行するためのチームづくりを行う



4 緊急時マニュアル

緊急時の手順を文書化する



5 傷病者発生時の緊急時対応フロー

緊急時の行動指針を作成する



6 緊急時の連絡体制

緊急時に誰が、どこに連絡するか整理する



7 健康状態の把握

従業員/住民の健康状態を把握する



8 消防/医療機関との協力と救急車の案内

消防署や病院と連携する



9 振り返りと改善

次に備えた課題の抽出と検証と改善



10 メンタルケア

対応後に発生する心的ストレスへの対策



2 定期的なトレーニング



- 会社/組織で担当者を決める
 - 産業医がいる場合は産業医にも相談
 - 講習会自体は消防や救命講習を実施している団体に依頼も可
- 全員が少なくとも年1回の講習を
 - 防災訓練などと合わせて実施
 - 新人研修などでも有用
 - 初期対応だけでなく緊急対応チームとして訓練も
- 実際の現場をイメージしたチームでのシミュレーション講習
 - 売り場で人が倒れた
 - エレベーターホールで人が倒れた など
- 救急車到着までの約10分をイメージした講習
- 従業員多数の場合はAED財団オンライン講習なども活用

3 体制づくり

緊急時の体制づくり

- マニュアル策定、EAP全体の監督、訓練企画・実施、事後の評価などを一元的に管理する専任のコーディネーターを指名し、その人を中心に計画をたてる
- 担当者は緊急時のマニュアルやトレーニングの企画のほか、緊急時対応チーム単位での対応ができるような体制を構築する
- 作成したものはトレーニングや実運用を通して適宜アップデートする
- 産業医と相談して巡視時のチェックリストに入れるなど、定期的に確認できる体制を作る

緊急時対応チーム

- 救命処置は複数人で対応することが重要
- 緊急事態発生時に混乱なく動けるよう、リーダー、119番通報担当、救急隊誘導担当、AED搬送担当など、各メンバー役割を事前に明確にし、現場での適切な指示のもとでスムーズに行われることが重要
- チームに依存するだけでなく、だれでも起動できるよう全従業員/スタッフ/住民が最初の対応ができるよう訓練
- エリアが広い場合は、AED財団提供のRED SEATも活用

4 緊急時マニュアル

- BCPの一環として、会社/施設の重症傷病者発生時のマニュアルを策定する
- マニュアルは作るだけでなく、周知が必要
 - 定期的な訓練の際にマニュアルを見るようにする
 - アクセスしやすい場所に置く(イントラネットトップページ、壁に貼るなど)
- マニュアル内で以下について決めておくのが望ましい
 - 緊急時対応チームの編成
 - 緊急時対応フロー

5 傷病者発生時の緊急時対応フロー

- 緊急時の行動指針をフローにまとめる(裏表紙「緊急時対応フロー(例)」)
- 自施設の状況にあわせ策定し、実際に使える状態にする
- 実際の対応時はフローを見ながら行動するのではなく、定期的なトレーニングの際に動けるようにしておく
- 行動指針に付随して緊急時対応チームのそれぞれの役割が行うことも整理する
- トレーニングや実際の運用を通して適宜修正する

1 AEDの戦略的配備、場所の把握

AEDの配置と管理①

- 3分以内にAEDによる電気ショックができるような体制作り
- 建物内にある場合
 - 場所や表示を工夫し、どこからでも3分以内にAEDによる電気ショックができる体制を構築
 - 図面上ではなく実際にAEDを取りに行き/取り寄せ、電気ショックまでにかかる時間を計測する(階層構造やセキュリティなどで時間がかかる可能性)
- 建物内がない場合
 - 平日/休日、日中/夜間でどこが直近のAEDなのか事前に確認し、迅速に持ってくるができる体制をつくるのが望ましい
 - AEDのリース、レンタルや購入も検討
 - AEDをマッピングアプリ上で管理する方法も有効(AED N@VI)
- 設置場所
 - AEDを事務所の誰もが日常的に目にする場所に設置し、全従業員がその場所を把握できることが重要(施設の入口付近、多くの人を通る廊下、エレベーターホールなど)
 - 鍵をかけた部屋やキャビネットに保管せず、夜間休日含め誰もがいつでもアクセスできるようにする

AEDの配置と管理②

- 表示と周知
 - AEDのJISマークを活用する
 - 施設案内図やエレベーター内のフロア案内などにAEDの場所を明示し、全従業員がその場所を正確に把握できるようにする
 - AED本体も遠くからすぐわかるように看板を多面や立体にする、トイレと同様にAEDの位置を示す看板を設置する、などの工夫が必要

AEDの配置と管理③

- 維持管理
 - AEDがいつでも使用できるようAEDの日常的な管理責任者を明確に定める
 - マンション:管理組合、オフィスビル:ビル管理会社/防災センター、商業ビル:防災センターまたは警備部門 など
 - AED本体には、正常に作動するかを自己診断するセルフチェック機能が備わっている。インジケータ(正常か異常かを示すランプやサイン)の色や状態を日常的に確認する体制を整える
 - 毎日チェックし、チェックした人がサインを入れる用紙をAEDと一緒にしておく
 - 消耗品の管理: 電極パッドとバッテリーには使用期限がある。交換時期をラベルなどで明確に表示し、期限に基づき適切に交換する。また、緊急時に備え、予備の電極パッドを準備しておく
 - 耐用期間の確認: AED本体にも耐用期間が設定されている。これを確認し、期間を過ぎたものは速やかに更新する
 - 最近のAEDの中では、オンラインでチェックを実施し必要時には通知する機能をもつAEDもある
- 高層ビル/マンションの場合
 - 高層階の場合、垂直方向へ移動する際に時間がかかることが問題
 - AEDを迅速に持ってくるために、1階のみではなく、複数階に設置する、リスクの高い(利用者が多い)階に設置する、などの工夫が必要
 - エレベーターホールや、警備室にあると垂直方向への移動がスムーズ
 - AEDを持ってくるまでどれくらい時間がかかるか計測しておき、電気ショックまでに3分以上かかる場合は対策を検討する

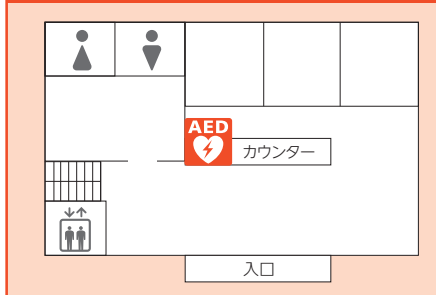
AED N@VI



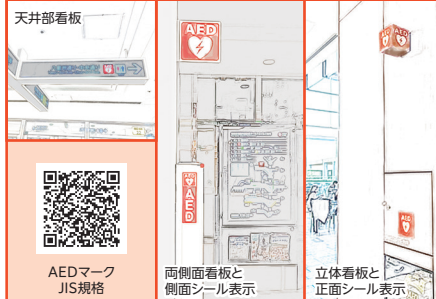
AED N@VIでは、全国のサポーターにより登録されたAEDをマップ上に表示。サポーターからの情報をもとに登録・更新を行うことで、常に最新の正確なAEDの位置情報が確認できる。「最寄りのAED検索」機能で一番近くにあるAEDまでのルートを検索することも可能



フロア案内図のAED場所の表示例



AEDの看板設置例



24時間いつでも使えるAEDへ

公共性、社会貢献の視点から24時間、いつでも、だれでも使用できる場所への設置も検討

AEDを「置いてある」から「使える」に

EAP Emergency Action Plan:緊急時対応計画

10 メンタルケア

- 救命処置に関わった人3~7割がなんらかの心的ストレスを生じたという報告がある
- 関わったメンバー内で気持ちを振り返る時間をつくる
- 心的ストレスに対して相談できる体制を構築しておく(保健師、産業医、自治体/消防など)
- 下記二次元コードも参照



バイスタンダーサポートサイト 臨床救急医学会 NPO法人ちば救命AED普及研究会



9 振り返りと改善

- 実際にAEDが使用された事案が発生した後は、必ず対応の振り返りを実施する
- 何がうまくいき、何が課題だったのかを検証し、EAPやフロー、訓練内容の改善に繋げる
- その他定期的に巡視チェックリストの項目が達成できているか確認し、できていない場合はできるようにする(担当者/産業医チェックリスト参照)

8 消防/医療機関との協力と救急車の案内

- 地域の消防機関と事前に施設の緊急時対応計画を共有し、建物の構造、最適なアクセスルート、入口の解錠方法、AEDの設置場所といった情報を伝えておくことで、救急隊の現場到着から活動開始までの時間を大幅に短縮することができる
- 日中/夜間、平日/休日で受診可能な医療機関のリストを作っておくと、急な受診時に便利
- あらかじめビル管理者側との事前の連携訓練をし、傷病者発生時は、エレベーターの優先制御、エレベーターを止めておく人、などをたてる
- 車両駐車場所から現場まで案内する人が必要

7 健康状態の把握

- 産業医や保健師と連携し心停止リスクの高い従業員を把握しておく(ただし個人情報との兼ね合いについては会社内の規定に従う)
- リスクの高い従業員がいるかどうか、定期検診を受けさせることも必要

6 緊急時の連絡体制

- まず119番通報を! その場で発見者が実施し救命の連鎖を早く繋ぐことが重要
- 消防からも折り返し電話が来ることがある
- 連絡する人は連絡することに集中することが望ましい
- 緊急時対応チームを立ち上げ、役割分担を行い、チームで対応することが必要
- 緊急時に誰が、どこに連絡するか、すぐにアクセスできる場所にまとめておくのが有用
 - 上長、家族、警備員など
- 忘れがちなもの
 - 救急車に乗るための身支度(保険証/マイナンバーカード、携帯、財布など)
 - 同乗者の確保:会社側と連絡できる人
 - 家族への連絡、連絡先の救急車への共有